

夜の王は乙女に溺れる

登場人物 紹介

マノンの祖父母

ノエル

マノンの弟。

ロドルフ

マノンが勤めていた
ベクレル家の当主。富豪。

ミシェル

シルヴェストル王国の王太子。
クロードに鬱屈した思いを
抱いている。

エレノア

ベクレル家の令嬢。我侫かつ
気まぐれで、負けず嫌い。

クロード

名門ラヴェース家の当主。
社交の場にはほとんど出てこない
ため、彼の姿を知るものは少ない。
人間ではないという噂がある。

マノン

幼いころに両親を亡くし、
祖父母と弟の生活を支えるため、
ベクレル家に働きに出ている。
勤め先の令嬢の身代わりとして、
「魔物の王」と噂される
クロードに嫁ぐことになるが……

目次

夜の王は乙女に溺れる

7

甘い口づけを蜜月に

251

夜の王は乙女に溺れる

序章 奪われる純潔

(そんな……どうして?)

マノンには困惑していた。

はちみつ色の髪の毛の、いかにもおとなしそうな十七、八歳ほどの少女だった。大きくつぶらな瞳に、小さな鼻と口。一見すると地味な印象だが、よく見ると整った顔立ちをしていることがわかる。

彼女は、エメラルドグリーンの瞳にたつぷりと涙をためていた。うつぶせに寝かせられ、襟元ははだけられている。そこからゆたかなふくらみが覗いていた。

「いや……っ！ やめてください、侯爵さま……！」

マノンは自らのしかかってくる男に懇願した。

彼女の華奢な体を、全身を使って押さえ込んでいるのは、黒い髪を持つ大柄な男だった。といっても、巨軀という印象は受けない。どちらかというとやせ気味だが、腕も、足も、背中も——どの部位も引き締まった筋肉に包まれていた。

前髪は長く、彼の端正な顔に影を落としている。伶俐な瞳はまるで猫のような金色。瞳孔は鋭く尖り、組み敷いたマノンを、獣のように飢えたまなざしで見ている。

マノンは、追いつめられたウサギさながら弱々しく首を横に振る。

「い、いや……っ！ いやです、侯爵さま……っ！」

男の骨ばった手が、マノンの胸元へとすべりこむ。怯えたマノンが震えあがると、彼はその反応を合図にしたかのように、彼女の乳房を揉みしだいた。

「やっ……っ！」

やわやわと捏ねるように揉まれて、マノンはその腕から逃れようと身をよじった。しかし男は彼女のそんな動きさえも許さないとでもいうかのごとく、両手を使ってマノンの胸を丹念に捏ねる。

「やあぁっ……っ！」

強い力で胸を揉まれて、マノンは反射的に縮こまる。全身をこわばらせた彼女の細い首筋に、男は唇を寄せた。マノンの香りを味わうように大きく息を吸ってから、低く息を吐く。

(いったいどうしてしまったの、侯爵さま……。さっきまでは、あんなに優しくかったのに……！)

「んっ……っ！」

はじめは何も感じなかったのに、捏ね繰り返されたマノンの胸は、次第に熱を帯びていった。その熱はやがて乳房の先端に集中していく。

(な……何なの？ この感覚……どうなっているの?)

男はマノンの体の熱を見透かしたのか、ぎゅっと乳房の先端をつまむ。

「ひゃっ……っ！」

全身をびりびりと駆け抜けた衝撃に、マノンは悲鳴を上げた。

「あつ、やつ……そんな……あつ」

男の指先は、マノンの乳首をこりこりとしごく。その動きに従って、先端はよりかたく凝こって
く。

(どうして……どうしてこんなことになってしまったの?)

泣きそうな気持ちになりながら、マノンは記憶を手繰り寄せた――

第一章 偽りの結婚

1

今にも雪が降り出しそうな、寒い日のできごとだった。

「お前には、ラヴレース侯爵に嫁いでもらうことになった」

シルヴェストル王国、ラヴレース侯爵領の港町、リデア。その町一番の富豪として知られるベクレル家の客間にて、当主ロドルフが言った。

「……え？」

マノンはその場に凍り付く。

ちよこんと椅子に腰かけているのは、はちみつ色のおさげ髪に、白いキャップをかぶり、黒いワンピースに簡素なエプロンを身に着けた少女だった。その姿は、どこから見ても屋敷に仕える使用人そのものだ。

彼女は驚きのあまり、エメラルドグリーンの瞳をしばたたかせる。

「あの、旦那さま。……今、なんて？」

ロドルフは豊かな口髭くちひげを撫でながら、マノンの問いに嘆息し、答えた。
「お前にエレノアの身代わりとなって、侯爵家に嫁いでもらうと言った」

「わ、わたしが、お嬢さまの代わりに……？」

「ラヴレース侯爵のことは知っているだろう」

壮年のロドルフの重々しい口調に気圧げあつされながら、マノンはこくりとうなずいた。そして、おそるおそる視線を壁へ移す。

客間の壁には、一枚の大きな絵画が飾られていた。貿易商であるロドルフが海の向こうで買い付けてきたという絵だ。

そこには、魔物たちで混沌こんとんとしていた土地をまとめあげた建国の王、シルヴェストル一世の雄々しい姿がある。

その筆は巧みで、魔物たちが王の後光によって目をくらませ、倒れゆく様さまが躍動感やくどうかんたつぷりに描かれていた。だが、弱り、倒れながらも、魔物たちの不穏な瞳の影は決して消えてはいない。

マノンはこの絵が苦手だった。幼い頃から怖い話は嫌いだったのだ。特に魔物関係は不幸な結末がついてまわるので、ことさら苦手だった。

それに――

(ラヴレース侯爵さまは、人間ではないという噂があるわ)

シルヴェストル王国には魔物についての言い伝えがたくさんある。その昔ばなしで語り継がれる魔物の世界の権力者――夜の王と呼ばれる存在に、侯爵は容姿くさうしが酷似くそししているそうなのだ。

彼は夜の王と同じ、黒い髪に、まるで猫のような金色の瞳を持つのだという。

(夜の王……)

壁に飾られた絵画の中で、シルヴェストル一世の後光に恐れをなして逃げ出している魔物たち。

あの恐ろしい生き物たちはみな、夜の王が統べる夜の世界の住人なのだと言われていた。その夜の王――ラヴレース侯爵に、マノンが嫁ぐだなんて、いったいどうして。

「侯爵の花嫁は、かれこれ六人ほど、彼のもとを逃げ出している」

ロドルフが面倒くさそうに言った。

「侯爵にはよからぬ噂がたくさんある。逃げ出した六人の花嫁の件だけではなく、屋敷では夜ごと何者かの絶叫が聞こえるだとか、窓に映る影が人のかたちをしていなかっただとか……。その侯爵に、とうとう私の娘、エレノアが召し出されることになった」

「どうして、ベクレル家に、そのようなお話が……」

「お前も知つてのとおり、我がベクレル家は貴族ではない、ただの商家だ。……何でも侯爵は結婚を急いでいるようだな。このあたりに居を構える貴族たちに、次々と縁談が持ち込まれたそうだが、どの家も断ってしまったらしく、とうとう当家に白羽の矢がたった。おそらく貴族ではない我が家なら、侯爵家からの縁談を断ることなどできないと思われているだろう。――事実、そのとおりののだが」

自嘲じちやうめいたロドルフの言葉に、マノンはごくりと唾を呑んだ。

客間に呼びだされた時から、おかしいとは思っていたのだ。

何かの手伝いをさせられるでもなく、ロドルフと向かい合うように座らされたと思ったら、年か
さの使用人によってお茶が運ばれ、あまつさえお茶菓子まで出された。普段ならば絶対にありえな
い待遇である。怪訝けげんに思わないはずがない。

じわりじわりと額に汗がにじむ。そんなマノンに見向きもせずに、ロドルフが先を続けた。

「重ねて言うが、いくら金があっても、我が家は貴族ではない。王家から直じかに爵位じやくゐを賜たまった由緒正
しいラヴレース侯爵家からの縁談を、断ることは困難だ。だが、だからといって、おめおめと娘を
怪物の花嫁として差し出すわけにはいかない。よって、お前に代わりを務めてもらうことにした。
幸い侯爵は一度もエレノアと顔を合わせたことがないからな」

「そんな……！」

マノンは思わず席を立った。

「そ、それはわたしが、エレノアさまとして侯爵さまのもとにお嫁に行くということでしょうか？」

「そうだ。お前はマノンとしてではなく、エレノアとして嫁ぐのだ」

「わ、わたしのような下賤げせんのものに、お嬢さまの代わりなど務まるはずがありません。きつとすぐ
にばれてしまいます」

確かにマノンは、ベクトル家の一人娘エレノアと見た目の特徴がよく似ていた。両者とも金髪で、
瞳の色は緑。年齢も同じ十八歳だ。

けれど、エレノアのきらびやかな金髪に比べれば、マノンのほちみつ色の髪は若干やわらかな色
味をしていたし、瞳の色だって、どちらかというとなノンのほうが暗い色をしている。それにエレ

ノアは誰もがひとめで美人だとわかる華やかな面立おもだちだが、マノンのほうは瞳が大きいばかりで子
供っぽい顔つきをしている。とても同一人物として通用するとは思えなかった。

「明日、侯爵家へ向かう。お前はそこで侯爵に挨拶をしなさい」

「お、おっしゃっている意味がわかりません……！ どうしてそんな、侯爵さまを、だますような
真似なんて……」

（旦那さまは怖くないの？ もしばれてしまったら、このお家だって、取り潰されてしまうかもしれ
ないのに……）

「お前には確か弟がいたな、マノン」

ロドルフの言葉に、マノンはびくりと身を震わせた。

「お前はこの屋敷に住み込みで働いているが……長期の休みには祖父母と弟の暮らす故郷へ帰って
いるらしいじゃないか。両親はお前が幼い時に死んでしまったから、お前の仕送りが家族を支えて
いると聞いたよ」

「だ、旦那さま……」

「お前が侯爵の前でエレノアとして振る舞っている限り、弟も祖父母も悪いようにはしない」

普段は眉間に皺しわを寄せてばかりのロドルフが、白々しいほどにこやかな笑みを浮かべてみせた。

「エレノア・ベクレルとしてラヴレース侯爵に嫁ぎなさい。お前のような身分の低い人間が、侯爵
家の花嫁になれるなんて、願ってもないことだろう？」

ほとんど脅しのような発言に、マノンは言葉を失って立ち尽くすことしかできなかった。

五年前——。十三歳の時に、マノンの両親は馬車の事故で死んでしまった。歳の離れた弟はその時まだ三歳と幼く、収入のない祖父母の家で姉弟が一緒に世話になることは困難だった。

マノン自ら働きに出ることに決め、祖父母に迷惑をかけないよう、住み込みで雇ってくれるベクレル家に職を求めた。

ロドルフ・ベクレルは一代で財を成した豪商だ。貴族の血が流れていないため、宮廷の社交界に顔を出すことはかなわなかったが、最近では金銭的余裕がない貴族などが彼に借金を申し込むこともあり、近隣一帯で名を馳せていた。よって使用人はいくらいても足りないらしく、簡単に雇ってもらうことができた。

そんなベクレル家で働き始めて五年。まさかロドルフから、侯爵家に嫁ぐよう命じられることになるなんて、マノンは思いもしなかった。

『お前のような身分の低い人間が、侯爵家の花嫁になれるなんて、願ってもないことだろう？』

確かに子供の頃は、裕福な家の花嫁になることに憧れを抱いたこともある。だが現実が見えるようになってからは、そのようなことは夢物語なのだと言いつつ、堅実にこつこつと生きてきた。

それなのに——

(わたしが、お嬢さまの身代わりで侯爵家にお嫁に行くことになるなんて……！)

「あなた、ラヴレース侯爵さまに嫁ぐことになったんですって？」

ロドルフの一人娘、エレノア・ベクレルがつまらなさそうな顔で言った。

夜、マノンは寝間着に着替えたエレノアの髪を鏡台の前で梳いでいた。念入りに肌の手入れをするエレノアの間に、消え入りそうな声で「はい」と答える。

「呆れるわよね。このわたくしの身代わりを、よりよってあなたが務めることになるなんて」

エレノアは鏡越しにマノンの顔を見て、失笑を漏らした。

確かにマノンなどが身代わりを務めるなんて恐れ多いほど、エレノアは華やかで美しかった。金色の巻き毛に、透き通るような白磁の肌。家事など一度もしたことがないような、すべすべとしたおやかな手。

「でもまあ、きつとばれないでしょうね。なんでも侯爵は一度も社交界に顔を出したことがないっていう話だし」

「一度も……？」

侯爵ほどの高い地位を持つ者が、一度も社交の場に顔を出さないだなんて、そんなこと可能なのだろうか。貴族にとって、社交界というものは、とても重要なものであるはずなのに……

「そうよ。何でもあの家の当主は代々社交の場に顔を出さないことで有名なんですって。さすがに

身内の集まりみたいのには顔を出すようだけど、他はまったくなのよ。要するに、屋敷に引きこもって出てこないの。だから向こうはわたくしの顔なんて知らないし、わたくしの代わりに嫁いだあなたが、侯爵さまと一緒に社交界に出ることもないわ。国王陛下がどうしてそんな人から侯爵位を取り上げないのかはわからないけど……、でもそのおかげであなたがわたくしの代わりに嫁いだ後も、わたくしはこれまでどおり自由に暮らしていけるってわけ」

エレノアはくるとマノンを振り返る。そして意地の悪い笑みを浮かべた。

「ねえ、知ってる？ あそこでは使用人もね、死ぬまであの屋敷を出られないのよ」「死ぬまで……ですか？」

「この間、葬列が町はずれを歩いていたので、あなたも見たでしょう。あれはね、ラヴリース侯爵家で働く女中の葬列だったの。かわいそうに、ラヴリース侯爵家で働く者は、あやうって死体になるまで屋敷から出してもらえないのよ」

「そんな……」

震えあがるマノンを見て、エレノアは満足そうな顔をする。

エレノアはマノンを嫌っていた。どうやら彼女は、マノンのように内気な娘を見ると、いじめずにはいられない性分らしい。

マノンは、エレノアの外出に付き添って出かけることが多々あったが、エレノアはその都度、マノンをいじめた。きらびやかな夜会にマノンにだけ襦袢ほろもぐを着せて連れ歩き、眉をひそめる周囲に對して、「みじめな孤兒に優しくする令嬢」を上手に演出するのである。

きつとエレノアは、マノンがベクレル家を出ていくことになって清々せいせいしているに違いない。

「それで、あなた。いつ侯爵さまへ挨拶に行くの？」

青ざめたマノンを満足げに眺めていたエレノアがたずねた。

「……明日です、お嬢さま」

「そう、残念ね」

ちつとも残念ではなさそうな口ぶりで、エレノアは笑う。

「なら、明日があなたの命日ってことにしておきましょうか」

十

翌朝早くに、マノンは馬車に乗せられた。侯爵家に向かうためである。

天気が悪かった。今年はじめの雪が降るか、朝からベクレル家は冬支度に大忙しだ。シルヴエストル王国では一度雪が降り出すと、以降なかなか晴れ間が見えなくなるのが常だった。

しかしそのようなことも、もうマノンには関係なかった。なぜなら彼女がベクレル家で雪かきをすることは、きつと二度とないのだから。

馬車の椅子に腰かけると、軽い眩暈めまいをおぼえた。ぎゅうぎゅうと内臓を押しつぶすように締め上げられたコルセットが苦しい。

マノンはエレノアのおさがりの服を着ていた。

本来ならばエレノアが普段着ているような流行の最先端のドレスを着ることが望ましかったのだが、マノンにはエレノアより背が低いため、サイズのあうものを探していたら、結果的に数年前のデザインになってしまったのだ。しかし、それでもやはり質の良い品らしく、ドレスは輝きを失っていない。

それはマノンのエメラルドグリーンの瞳が映える、深緑色の落ち着いた雰囲気のドレスだった。丸く切り取られた胸元から、普段はひた隠しにしている彼女のゆたかなふくらみが、なだらかな曲線を描いている。背のわりに胸ばかりが大きく育ってしまったことを、マノンはとても恥ずかしく思っていた。

白い絹の手袋に、ドレスの裾にふんだんにあしらわれた手編みのレース。普段はおさげに編み込んでいたのはちみつ色の髪は、ゆるやかに巻かれて背に流されていた。

きれいにめかしこんでもなお、マノンの気持ちは晴れなかった。それどころか沈んでいく一方である。馬車にがたごとと揺られるたび、彼女は吐き気をこらえるようにして口元へ手をあてた。ロドルフは別の馬車に乗っているため、車内にいるのはマノンひとりだけだった。

これから嘘をつかなくてはならないことも憂鬱^{ゆううつ}だったし、その相手が夜の王と噂されるラヴェルス侯爵であることも彼女の不安に拍車をかけていた。けれど、何よりもいやなのは、こうして馬車に揺られていることだ。

マノンの両親は馬車の事故で死んだ。ふたりの子供のうち、年長のマノンが遺体の確認に立ち会い、そして無残な姿となった両親を目の当たりにした。

あれ以来、馬車が怖くて仕方がなくなってしまった。だから極力乗らないようにしていたのに、まさかこのような状況で乗ることになるなんて。

(……はやく降りたい……)

ベクレル家から侯爵家までは、馬車でほぼ一日かかる。朝早くに乗り込んだにもかかわらず、日が沈みかけている今になっても、未だ侯爵邸にたどり着いていない。

街の喧騒^{けんそう}から遠ざかるにつれて、周囲の景色は薄暗くなっていた。鬱蒼^{うつそう}とした木々が取り囲む道を、馬車はひたすら走り続ける。

はやく着いてほしい。侯爵に挨拶をすませさえすれば、今日はひとまず引き返すことができると言われていた。しかし帰りも馬車に乗らなくてはならないと思うと、暗澹^{あんたん}たる思いに苛まれる。

のみならず、今日の顔合わせで両者からさしたる反対意見がなければ婚約成立とし、後日正式に結婚となるのだとか。けれど侯爵はあまり人前に出ることを好まないため、結婚式はしないか、ごく内々に限ったものになるかもしれないということだった。どのみち、マノンに決定権などない。

(――身代わりとしての、結婚なんて……)

遠く離れた祖父母宅に住む弟の顔を思い出し、マノンはますます気鬱^{きうつ}になった。逃げ出したい気持ちと、逃げ出しはいけないのだと思う気持ちがせめぎ合い、胸が苦しくなる。

これから自分は、どうしたらいいのだろうか。

エレノアの代わりに嫁いだとして、どうせいつかはばれてしまうに決まっている。そうなたとしたら、自分は、祖父母は、弟はいつたいていどうなってしまうのだろうか。

悪いことばかり考えていたせいか、侯爵家に到着した頃には、マノンの意識はすっかり朦朧もうろうとしていた。窓の外を眺める余裕などなかったし、馬車のステップを下りながら自分がふらついていることにも気づかなかった。

ふと地面がやわらかくなつたなどと思ったら、マノンの視界は反転し、そのまま地面に倒れ込む。「おっと」

ふわりと重力を感じさせない動きで、マノンの体が支えられた。あたりには雪が降り積もっていた。

「大丈夫？」

かけられた声は男のものであった。マノンは茫漠ぼうぼくとしていた意識を次第に取り戻す。

「あ……」

倒れかけたマノンを抱き支えていたのは、恐ろしいほどの美貌の男だった。

二十代後半くらいだろうか、黒い髪に、伶俐れいりな巨元。筋の通つた鼻に、薄い唇、細い顎あご。そのどれもが彼という人物を美しく彩いろどるために配置されているようだ。

しかしマノンが何よりも驚いたのは、その男の瞳の色だった。

(きれいな金色……)

たとえるなら静かな月か、それとも燃え盛る太陽か。静けさと激しさの両面を兼ね備えた金色の瞳は、マノンの姿をうつしてはっと見開かれる。

その動きは、どこか野生の獣を連想させた。

マノンは呼吸を忘れ、その瞳に魅入みいった。こんなにも美しいのに、瞳だけがまるで獣のようだななんて……

「君は……」

ごくり、と男の喉が上下した。金色の瞳孔どうこうが、一瞬だけ鋭く尖る。

男に抱きかかえられていたマノンは、彼の心音が大きく跳ね上がるのを感じた。

(この人は――)

「侯爵さま！」

見れば別の馬車から降りたロドルフが、雪をかきわけるようにしてこちらに駆けよつてくるころだった。ロドルフは男の腕に抱かれているマノンを見て、驚いた様子で目を瞳みまる。

「わざわざ迎えに来てくださったのですか？」

「ええ、こちらからご足願あしねがったわけですし」

ロドルフの言葉に、黒髪の男は気さくに応じた。彼はそして、腕の中でぐつたりとしているマノンを気遣うように覗き込む。

「ところでベクレル殿。お嬢さんの顔色が優れません。休ませてあげたほうがよろしいのでは」

「あ、ええ……」

「失礼」

黒髪の男はマノンを抱き上げた。

何が起こつたのかわからず、とっさに体をこわばらせたマノンだったが、自分で思う以上に消耗

していたようで、手足に力が入らなかった。

男に抱き上げられつつ、マノンには視界の端で、門の向こうのラヴレース邸を見た。

(なんて大きな屋敷なのかしら……)

町一番の富豪であるベクレル家も大きかったが、ラヴレース侯爵家の比ではない。屋敷の前にある門扉もんびからして、規模が違っていた。

マノンの身長は倍近くほどの高さのある鉄の門——その奥にはゆるやかな上り坂が続く、小高い丘の上には巨大な屋敷が建っている。まぶしいほどに白い壁でできたそれは、まるで白亜の城のようだった。細長くて大きな窓がずらりと並び、窓の間には等間隔で、天使と悪魔の胸像が交互に飾られている。

重たげな雲に、冷たい風。思わずマノンが身震いをする、男は自らの外套がいのちで彼女の体をくるむように腕を動かした。

「寒い？」

答えようと思ったのに、唇がうまく動かない。そんなマノンを見て、男が困ったように微笑む。

「眠っていいよ」

優しくささやかれて、なぜか安心した。目を閉じると、そのまま意識が落ちていった。

十

目が覚めたのは、絶叫が聞こえたからだ。

「ー」

マノンは跳ね起きた。断末魔だんまつまのような叫び声が、耳の奥に残っている。心臓がどくどくと鼓動を刻み、全身は汗でぬれていた。

マノンは見覚えのない寝台に寝かされていた。広い部屋だ。天蓋てんがい付きの寝台には紗しやの天蓋布てんがいふがタッセルでとめられている。部屋の中の調度品はどれも優雅で気品があり、あちこちに花の装飾が施されていた。

(そうだわ。わたし、侯爵さまのお屋敷の門の前で倒れて、それで……)

あの黒い髪の男に、抱き支えられたのだ。

マノンはすると寝台を抜け出した。先ほど聞こえた絶叫が、まだ彼女の体を震わせていた。こわごわとした手つきで扉を開けると、思ったよりも簡単にそれは開いた。

扉の向こうには、大きな窓がたくさん並ぶ廊下が続いている。窓の外は、雪景色だ。積雪の具合を見るに、さほど長い時間は眠ってはいなかったようだ。

マノンは廊下を歩き出した。先ほど窓から見えた光景から考えると、この部屋はおそらく二階だろう。客間は往々おうおうにして一階にあるものだから、階段を探そうと思ったのだ。ロドルフはきつと、客間にいるはずである。

絶叫の聞こえた屋敷をうろろするだなんて怖かったけれど、このままひとりであるほうが、マノンにとってはずっと怖いことだった。

屋敷は壮麗という言葉をそのまま体現したかのような、豪華な建物だった。マノンが歩いている廊下には、たくさんの骨董品こどうひんがずらりと並び、床はぴかぴかに磨き上げられている。

(怖いくらいに、静かだわ……)

物音ひとつしない不気味な屋敷。まるで外の世界から遮断されてしまったかのような——夜の世
界へと続くかのような——

そこまで考えて、マノンは首を横に振った。

(そんなこと、あるわけない)

事実、そのようなことはなかった。階段を見つければ、一階へと下りると、どこからともなく話し声
が聞こえてきたのだ。

声をたどって行きついた、半開きの扉を開ける。大きな暖炉の炎が、部屋の内装を優しく照らし
出していた。

優雅なテーブルを挟んで、ビロードのソファに腰かけ、話していたのは、男二人だった。ロド
ルフと、そしてあの黒髪の男だ。

先にマノンの姿に気づいたのは、黒髪の男のほうだった。

彼は彼女の姿を見つめるなり、ほっとしたように破顔する。

「お嬢さん。具合はもう大丈夫？」

その言葉にロドルフが振り返ってマノンを見た。彼は複雑な表情を作り、すぐに立ちあがる。

「それでは、侯爵さま。私たちはこれで……」

「もつとゆっくりされていてもよいのでは？ お嬢さんはまだ目覚めたばかりです」

「いえ、これ以上ご迷惑をおかけするわけにはいきません」

男は、一瞬だけ口を開いて反論しようとしたが、すぐに諦めたように淡く微笑む。

「そうですか。では玄関までお送り致します」

「侯爵さまにそのようなご足労をおかけするわけにはいきません。ここままで結構でございます」

ロドルフが近づいてきて、乱暴にマノンの手を取った。怒っているのかと思いきや、どうやらそ
のような様子でもない。ロドルフは男に向かって頭を下げ、歩き出す。

(帰るの？ ベクレル家に？ わたしはまだ、きちんと侯爵さまにご挨拶をしていないのに……)

強い口調で結構、と言われたためか、黒髪の男はマノンとロドルフのあとをついてはこなかった。
屋敷はしんと静まり返っており、マノンとロドルフの足音以外は、何の音も聞こえない。

ロドルフの歩みはまるで追っ手を振り切るかのようにだった。エントランスホールを横切って屋敷
を出、そのまま雪の降りしきる庭を脇目もふらずに歩いていく。エントランスから正門までは、そ
れなりに距離があったのだが、その間もロドルフはずっと無言のままだった。

門の前では馬車が待ち構えていた。来た時は二台だったのに、今は一台になっていた。

馬車を見た刹那せつな、吐き気がこみ上げてきた。けれどこの屋敷から逃れるためには、この馬車に乗
るしかないのだと自分に言い聞かせ、懸命に堪える。

御者ぎよしゃがドアを開け、ロドルフがステップをあがる。彼は自分だけ先に馬車へとあがると、振り
返って低い声で言った。

「後ろを向きなさい」

「え……？」

「後ろを向くんだ」

戸惑いながらも、命じられたとおりマノンには後ろを向いた。雪の上にはまだ自分たちの足跡が残っている。その先には、巨大な侯爵邸がたざずんでいた。

「世の男が結婚する理由は、おおむね妻が欲しいからではなく、家の存続のために子供が必要だからだ」

バタン、と音がした。何の音かと思ったら、それは馬車の扉が閉まる音だった。

はっとして振り返ると、御者が馬に鞭を打って、車輪がまわり始めたところだった。

「――旦那さま！」

マノンが悲鳴のような声を上げると、窓の向こうでロドルフが口を動かした。ガラス越しだったが、その言葉はしっかりとマノンの耳に届いた。

「侯爵の子を孕みなさい。そうすれば、お前が誰であろうとどうでもよくなる」

「ま……」

待って！

そう叫ぶことさえ許さないとでも言うように、馬車はあつという間にマノンをおいて、遠ざかっていった。

残されたマノンは、ただ呆然と立ちすくむ。

――おいていかれた。

雪の中、両手で自分の体をかき抱いた。

（こんなところに、ひとりで、おいていかれてしまったわ。まだあの悲鳴のことだって、話していないのに……）

どうしたらいいかわからずに、マノンはその場でうずくまる。

吸い込んだ空気は肺を凍らせるほど冷たい。上着を羽織っていなかった彼女は、体がひとりでに震え出すのを感じた。

寒い。このままここにいたら死んでしまう。歩いて帰るにしては、ベクレル家は遠すぎた。ここに来るまでだって馬車を疾走させてまる一日近くかかったのだ。

それに――

もしこのままおめおめと戻ったら、ロドルフはどんな顔をするだろう。マノンの祖父母や幼い弟のことを、どうしてしまっただろう……

後ろで、ざくりと雪を踏む音が聞こえた。

「……おいていかれてしまったの？」

耳に触れたのは、優しい声だった。

顔を上げると、そこには黒い外套に身を包んだ、黒い髪の男が立っている。どこまでも黒くくめなのに、瞳だけがきれいな金色に輝いていた。

男は膝を折り、自らの外套をマノンの肩にかける。想像以上の暖かさがマノンを包み込んだ。

——おいていかれてしまったの？

その問いに、マノンほくりと頷いた。

「そう……」

侯爵は悲しげに呟いた。

「おいで。このままここにいたら、風邪をひいてしまう」

男に肩を抱かれるようにして、マノンは立ちあがった。そのままふたりで雪の上を、屋敷に向かつて歩き出す。

これがマノンと、クロード・ヴィルバン・ド・ラヴレース侯爵との出会いだった。

2

その日、マノンは熱を出した。もともと苦手の馬車に乗ったせいで具合が悪かったことに加え、急激に体を冷やしたことも災いしたのだろう。

熱にうかされたまま夢も見えないほど深く眠り、気がついたら朝だった。窓の外から朝日がきらきらと差し込む、とても気持ちのいい朝だ。

彼女は、いつの間にか自分が夜着に着替えていたことに驚き、部屋に熱々の紅茶と朝食が用意されていたことに驚き、そして着替えが用意されていたことに驚いた。それなのに周囲には、まるで

人の気配がない。

(どうなっているのかしら……)

戸惑いながらも朝食を口に運ぶ。空腹だったためか、食事は頬が落ちそうなほどおいしかった。サクサクのクロワッサンにとろけるようなバター。甘い香りを漂わせるポタージュ。塩味のきいた茹で野菜。搾りたての香りが際立つ柑橘果汁。

食事を終えたマノンは、椅子の上に用意されていた服に着替えてから(すとしたデザインのコットンドレスは、とても着心地のいいものだった)、いつもの習慣で食器を手にし、部屋を出た。食器を台所に戻そうと思ったのだ。

屋敷は昨日、謎の絶叫が聞こえたとは思えないほど静かだった。窓の外の雪景色は、陽光に照らされて小さな水晶を散らしたように輝いている。

雪が降った翌日に晴れるだなんて、シルヴェストル王国の冬には珍しいことだった。普段のマノンだったならば、何か良いことの前触れかと考えただろうが、しかし今は日常からずれて生じるすべてのことが、悪いことの予兆なのではないかと不安で仕方ない。

台所は、だいたいの家では裏庭に面した半地下にあるものだ。昨日の記憶をたどりながら階段をおりて屋敷の中を歩き回ると、やがてそれらしき部屋を見つけることに成功する。

台所はきれいに片付けられていた。ずらりと並んだ食器棚に、大きな料理机。鉄のオーブンは壁に埋め込まれるように設置され、鍋やかんはきちんと磨き上げられたうえで棚の中に収納してある。

使用済みの食器を流し場に戻しながら、マノンには困惑した。

「……………」

なぜ誰もいないのだろう。こんなに大きな屋敷なのに、使用人の姿さえ見当たらないなんて……『ねえ、知ってる？ あそこでは使用人もね、死ぬまであの屋敷を出られないのよ』エレノアの言葉がよみがえった。

『この間、葬列が町はずれを歩いていたの、あなたも見たでしょう。あれはね、ラヴレース侯爵家で働く女中の葬列だったの。かわいそうに、ラヴレース侯爵家で働く者は、あやまって死体になるまで屋敷から出してもらえないのよ』

「お嬢さん」

急に声をかけられて、マノンの心臓は飛び跳ねた。

びっくりして振り返ると、クロードが台所の入り口にもたれて立っていた。相変わらず黒くくめの服装だが、こちらを見る金色のまなざしは優しくかった。

「侯爵さま……」

「おはよう」

「おはようございます」

「寝室にいないからびっくりしたよ。具合はもういいの？」

「はい。あの……、ご迷惑をおかけしました」

頭を下げてから後悔した。育ちの良い令嬢ならばこんなふうには手ずから食器を片付けるような真

似はしないはずだ。

「迷惑ではないよ」

いつの間にかマノンのすぐそばに来ていたクロードが、彼女に向かって手を差し出していた。

「おいで。少し話をしよう」

連れていかれたのは昨晚、クロードとロドルフが語らっていた客間だった。暖炉には相変わらず赤々とした炎が燃えている。

ティーカップからあがる湯気を見て、マノンはまたしても怪訝に思った。いったい誰が、いつの間にも用意したのだろう。

クロードはマノンをエスコートするように椅子へと座らせ、自らはその向かいに腰かけた。

「ベクレル家に、迎えを寄越すよう手紙を出すよ」

「え？」

「このまま帰れなくなるのは、本意じゃないだろう？」

「あ……」

マノンはためらった。ロドルフはおそらく、ここでマノンがクロードとなし崩し的に関係を持つことを望んでいるのだろう。

あわよくばマノンが子を孕めば、たとえ彼女がエレノアでないと露見したとしても、クロードが受け入れると思っっているに違いない。うまくいけばきっとマノンは生かされる。しかし失敗したと

したらどうだろう。

「本当は私が送ってあげられればいいんだろうけど、そうもいかなくてね。私は長時間、家をあけることがどうしてもできないんだ。だから、君に頼みがある」

「わたしに？」

「正午頃に郵便配達人が来るから、その時にこの……」

クロードが懐から白い封筒を取り出した。赤い封蝋が押されている。

「この手紙を渡しておいてくれないか。ベクレル家に届くようになっていいる」

「……わかりました」

「ありがとう」

クロードは席を立ち、マノンのそばへと足を運ぶ。マノンが差し出された手紙を受け取ると、満足そうに彼は笑って彼女の足元にひざまずいた。

マノンは驚いて一瞬、びくりと身をこわばらせた。そしてクロードが彼女の髪をひと房、手にしたことに、さらに驚いた。

クロードはそのまま、彼女のちみつ色の髪を唇に押し当てる。さながら、紳士が淑女の手の甲にキスをするかのごとく、優雅で慣れた仕草だった。

「お嬢さん。ベクレル邸への道のりは遠い。多分、君は二、三日はこの屋敷に滞在せざるを得ないだろう。その間、どうかふたつだけ私の言いつけを守ってほしい」

マノンの髪に唇を押し当てたまま、上目づかいにクロードが言った。金色の瞳が妖しく光を反射

する。

「ひとつめは、日が沈んだら必ず部屋に戻るということ。君が目を覚ましたあの部屋だ。いいね？」

「え……」

「ふたつめは、この屋敷の地下にある北の部屋へは、決して足を踏み入れないこと。何があっても、絶対に」

口元は笑みを刻んでいたが、彼の瞳は笑っていないかった。

マノンは思わず言葉を忘れた。ややあってから無言でこくりと頷く。

クロードは微笑んだ。

「ありがとう。それさえ守ってくれば、この屋敷にいつまでいても構わないよ。君を客人として歓迎しよう」

十

マノンは早くも後悔していた。

この屋敷は、やはり、どこかおかしい。

クロードに言われたとおり、マノンは昼過ぎに侯爵家を訪ねてきた郵便配達人に手紙を託した。

配達人はくすんだ赤毛の青年だった。

屋敷にまつわる不穏な噂のことについてたずねてみても、彼はにこにこしたまま首をひねるばかり

りで、マノンの質問に答えようとはしない。どうしてだろうと困惑していると、彼は自らの耳を指さした。耳が聞こえない、という意思表示のようだった。ならば仕方がないとマノンは自らの疑問を彼にぶつけることを諦め、身振り手振りで「お願いね」と伝え、手紙を渡した。

まかせるとばかりに頷く赤毛の青年の笑顔は、どこか弟のノエルを彷彿とさせた。
(ノエル……今頃どうしているかしら)

弟、そして祖父母のことを思うと、胸が締め付けられる。

本当ならば帰りたい。今すぐこの屋敷を飛び出して、ノエルと祖父母のもとへ駆けつけたい。けれどそんなことをしたら、ロドルフはきつと立腹するだろう。彼を怒らせた時、自分たちはいったいどうなってしまうのか、考えるだけでぞつとした。

自分が今、するべきことはわかっている。ロドルフの命令に従って、侯爵の子を孕むのだ。子を孕みさえすれば、いざロドルフに不必要だと判断されたとしても、クロードが守ってくれるかもしれない。けれど、それではあまりに……

そんなことを考えながら、マノンは与えられた部屋の窓からぼんやりと庭を眺める。

天氣が悪い。

朝方は快晴だと思っただが、いつの間にか空は分厚い雲に覆われてしまっていた。また雪が降り出すかもしれない。

その時、ふいにマノンは、視界の端で揺れるものを見た。

洗濯物だ。

白いシャツが、風にはためいて揺れていた。木と木の間に縄を張り、そこにたくさんの洗濯物が干されていたのだ。

(朝は、あんなものなかったはずよ。誰が干したのかしら……)

じつと洗濯物を見つめていると、空からひらひらしたものが降ってきた。雪だ。

(……雪)

マノンはためらった。だが、じつとしていることはできなかった。彼女はそのまま部屋を出て、洗濯物の干してある庭へと向かう。

あそこにいれば、もしかしたら洗濯物を取り込もうとする女中と顔を合わせることができるかもしれない。そうして話をすれば、少しは気がまぎれるかも。

雪が降りしきる中、しばらくマノンはじつと洗濯物の前でたたずんでいた。ところがいつまで待っても、誰かが駆けつけてくる気配はない。このままでは洗濯物が凍ってしまう。そう考えて、マノンはそれらをとりこむことにした。

(本当のエレノアさまなら、こんなことはされないはずだわ。だとしたら、誰かに見つかる前にとりこまないと……)

先ほどまでは誰かがやってきてくれることを望んでいたくせに、今度は誰もこないことを願いながらせつせと洗濯物をとりこんでいると、ふいに、軽い衝撃が後頭部に走った。

「？」

振り返るも、誰もいない。足元にも何も落ちていなかった。しかしよく見ると、雪の欠片のよう

なものが散らばっていることに気づく。雪玉が割れたものに見えた。

「え……」

雪玉は、自然には発生しないものだ。誰かが何かの意図をもって、用意しなければ生まれぬ。それをまじまじと見ようとしてしゃがみ込んだマノンの後頭部に、またしても、ぐしゃつと雪玉がぶつけられる。

「だ——誰？」

声を上げながらあたりを見渡す。前方にも後方にも、人影は見当たらない。それならばこの雪玉はどこからとんできたのだろう。

「……………」

マノンには怖くなり、洗濯物を抱きしめるようにしてそこから逃げ出した。

夜はもつと恐ろしかった。

日が暮れるまで客間でじっとしていたが、結局そこへクロードが姿を現すことはなく、マノンは戸惑いながらも諸々と、与えられた部屋へと戻った。そこには簡素だが湯気の立つ夕食が用意されていて、彼女は部屋で静かに食事をとった。

マノンの部屋は屋敷の最南に位置していた。まるでクロードが近づくなと言った北の部屋から引き離すかのようだ。

廊下の端にある部屋。彼女に用がない限り、誰かがこの部屋に近づくことはないはずだ。

それなのにその晩、複数の足音がけたたましくマノンの部屋の前を走り回っていた。

「……………」

マノンはシーツを頭からかぶって震えていた。エメラルドグリーンの瞳にたまった涙は、今にもこぼれ落ちそうだった。

『どうかふたつだけ私の言いつけを守ってほしい』

クロードの言葉がよみがえる。

『ひとつめは、日が沈んだら必ず部屋に戻るということ。君が目を覚ましたあの部屋だ。いいね？』

『ふたつめは、この屋敷の地下にある北の部屋へは、決して足を踏み入れないこと。何があっても、絶対に』

（侯爵さまが夜に部屋から出るなどおっしゃったのは、こんなふうに毎晩誰かが屋敷の廊下を走り回っているからなの？）

けれど、その誰かとは誰なのだろう。

マノンはベクレル家の客間に飾られていた絵画を思い出していた。

建国の王の後光から逃げ惑う魔物たち。彼らには彼らの世界があつて、そこを統べる者は夜の王と呼ばれていたと、そしてその夜の王は黒い髪に金色の瞳をもっていたと伝えられている。

（夜の、王……）

クロードの金色の瞳を思い返して、マノンは自分の胸がぎゅつと苦しくなるのを感じた。

（侯爵さまは、魔物を統べる夜の王なのではないかと言われているわ）

だとしたら、まさか、この足音の主は……
(……魔物……?)

ひととき大きな足音が近くで響いた。マノンには、ひっと悲鳴を呑み込み、再び頭からシーツをかぶって、ぎゅつと目を閉じた。

明け方になるとけたたましい足音もおさまり、マノンもようやく眠りにつくことができた。だが悪い夢を見てすぐに目を覚ましてしまい、結局ほとんど寝ることができなかった。

けだるく身を起こして時計を確認すると、時刻は朝だった。

ベッドのそばには、またいつの間にか朝食が用意されていた。食欲はなかったが、口をつけるとおいしかったので、結局きれいに食べてしまった。

マノンはそのまま食器を手に、ふらふらと台所へと向かう。

夜の恐怖とは正反対に、昼間は不思議なほど、ラヴレース邸に怖さを感じなかった。

本来ならば得体の知れない誰かが用意した食事を口にするこただって、警戒しなくてはならないはずなのに、気がついたらあの食事に手をつけてしまっている。

(本当に、この屋敷の炊事は誰がやっているのかしら)

それだけではない。マノンの部屋には朝になるといつも新しい服が用意されていたし、浴室にはきれいな湯が張られていた。屋敷の廊下には塵一つ落ちていない。

絶対に誰かがいるはずなのだ。誰かが、この屋敷の美しさを保っているはず。それなのにどうし

て、誰の気配も感じないのだろう。夜はあんなにも騒がしいのに……

「お嬢さん」

「！」

急に声をかけられて、マノンは驚いた。

ちやうど流し場に食器を戻したところだった彼女は、長い髪をひるがえすようにくるりと振り向いた。するとそこには、昨日同様に入り口に背をあずけ、金色の瞳を細めてマノンを見守るクロードの姿があった。

「おはよう」

「おはようございます……」

「よく眠れた？」

「え……」

その言葉に、昨晚のできごとがよみがえる。

ベッドにもぐりこむ自分、そして部屋の外で、まるで彼女をおどかすようにばたばたと響き渡る複数の足音――

マノンはとっさに、そのことをクロードに相談しようと思いを開いた。しかし、果たしてそのことを本当に彼に話していいのかわからなくなり、結局何も言えなくなってしまう。

もしクロードが本当に夜の王なのだとしたら、昨晚の不思議なできごとを口にすることが、吉と出るか凶と出るか、判断できなかったのだ。

クロードは、マノンが唇を開いて、閉じて、うつむくまでの一連の動きを根気強く見届けたあと、彼女が何も言わないのを察し、自分から口火を切った。

「今朝、ベクレル氏から返事が来たんだ」

「え？」

「早馬で届けてくれたらしい。一緒に読もうか」

「あ……」

ロドルフからの返事。

おそらくクロードからロドルフに送った手紙には、マノンに迎えを寄越すよう記されていたことだろう。ロドルフはきつと言葉を尽くしてクロードの要求を拒否しているに違いない。返事の内容は、読まなくてもわかった。

かといって、クロードの言葉を無下にできるはずがない。夜の王かもしれない人物とふたりきりになることは怖かったが、しかし今、目の前で優しく微笑んでいる彼は、とても悪人には見えなかった。

マノンは顎をひいて、消えそうな声で答えた。

「はい……」

マノンとクロードは、先日と同じ客間で額を寄せ合うようにして、一通の手紙を読んでいた。

ベクレル家当主、ロドルフ・ベクレル不在につき、家令が代筆——

家令が語るには、ロドルフは現在仕事で不在にしているため、そのような重要事項は使用人の身で決断しかねることであり、ひいてはしばらくエレノア・ベクレルを貴殿の屋敷でお預かりいたしたい、主人が帰り次第判断をおおき、早急に対応をとる次第——という旨が、実に回りくどく書かれていた。

(嘘だわ)

きつとロドルフは不在ではないはずだ。そうやって答えることで一秒でも長くマノンを侯爵邸に置いておこうとしているのだろう。

エレノア・ベクレル。

その言葉を見た途端、避けようもない事実が胃の中にずしんと重たく落ちてきた気がした。

自分は今、エレノア・ベクレルとして目の前の侯爵をだましているのだ。事実を知った時、クロードはどう思うだろう。怒るだろうか、悲しむだろうか、それとも……

クロードは、マノンが不安に苛まれながら手紙に視線を落としている間、黙って手の中でペーパーナイフをくるくると回していた。どこか遠くを見るようなまなざしで、何かを思索しているようである。

きれいな人だ、とマノンは改めて思った。

少し長すぎる黒い髪は、無造作に、けれどさりげなく彼の美貌を彩っていた。滴るほどの妖艶な色気が、彼の行動のすべてから漂っている。細められた金色の瞳は、見る者すべてを魅了するかのように光を閉じ込めていた。

彼を前にすると、マノンはこちら緊張してしまふ。自分が彼に嘘をついているからという理由だけではなく、彼が美しすぎるからだ。

それなのにクロードには、ちつとも気取ったところがなかった。それどころか、言葉の端々まで優しさが滲にじんでいる。クロードはずっとマノンに優しくかった。正しくは、マノンではなくエレノアに。

「これから、どうしようか」

「え？」

「父上のお考えはだいたいわかるよ。きみを少しでも長く、私のもとへ置いておきたいんだろう」心臓が凍り付くような感覚に襲われた。おそろおそろクロードの顔をうかがうと、彼は困ったように肩をすくめて笑う。

「そんなに怯おそえないで。これでもね、だいたい事情は察おぼしているつもりだよ。だから——」

言葉の途中で、クロードはびたりと動きを止めた。それまで軽快に手の中で回転させていたペーパーナイフが、床に落ちる。

彼はそのまま胸元を押さえ、前のめりになってうずくまった。座っていたソファがぎぎ、と音を立てながら後ろに下がり、クロードの体が床に転がる。

「——侯爵さま？」

マノンは慌てて彼の体を支えた。クロードは額に汗を浮かべ、苦笑する。

「ごめん……」

「どうなさったんですか？ どこか具合でも……」

「大丈夫、すぐにおさまる……」

「でも……」

苦笑いをするクロードの肌は、陶器のように白くなっていた。

（何かの病気？ お医者さまを呼ばないと——）

マノンは混乱していた。この屋敷には侍医じいはおろか、使用人のひとりも見当たらないのだ。リデアの街までは馬車で一日かかる。どうやって、誰に助けを求めればいいのかのさう。

しかしいずれにせよ、ここでじっとしているわけにはいかないことは明白である。

「……わたし、誰か、人を呼びに……」

「待て！」

立ち上がったマノンの手首を、クロードが力強くつかんで引き止めた。

「きゃっ……」

体のバランスを崩したマノンは、そのまま手繰たぐり寄せられるようにしてクロードの腕の中へと転がり込む。

「あっ……」

顔を上げると、すぐ目の前にクロードの美貌がせまっていた。

金色の瞳。

普段は優しいその瞳が、この時、別の光に輝いたような気がした。

瞳孔が鋭く尖る。

「医者はいいい。大丈夫だ、だから少しこのままで……」

クロードの手がマノンの頬へと伸びた。彼は両手で手挟むようにして、彼女の顔を包み込む。

「侯爵さま……？」

顔色が悪いためか、すべらかな肌に映えるクロードの唇が、いつそう赤く感じられた。まるで血をなぞったかのような、深い赤だった。

クロードは自らのその赤い唇を、マノンの額へと押し当てた。

「――」

クロードの唇は熱かった。触れられた個所が熱を帯びる。

驚きのあまり硬直したマノンに、侯爵はなおも口づけを繰り返す。額に、目蓋に、頬に、そして……

「だ……駄目です……！」

唇に口づけが下りてこようとした時、マノンは慌ててクロードから顔を背けた。そのまま彼の腕の中からも逃れようとしたのだが、ぱくりと耳を食まれてとっさに動けなくなってしまう。

クロードはマノンの耳を、いたわるようにして甘噛みした。

「あ……っ！」

はじめのうちは唇だけで食んでいたのだが、やがてねぶるように、ざらりとした熱い舌で触られる。

「あっ、あ……っ！」

クロードの舌は丹念にマノンの耳を舐めた。そうしていればいずれマノンが自分のものになるとでも思っているかのような、熱心な舌遣いだった。

「やっ……あっ……」

彼の手はマノンの首筋をたどりつつ、猫の子をあまやかすように動く。

骨ばった大きな手に首筋を撫でられ、耳を食まれ、舐められて、マノンはぞくぞくと身を震わせた。やがてクロードの手が彼女のボタンを丁寧にはずし始めた時、やっとな抵抗という行為を思い出す。

「だっ……っ！」

マノンは青ざめた。服を脱がされた後にすることといえば、ひとつに決まっている。

「や、やめてくださいっ……」

クロードの体を押しつけようとすると、再び腕を絡め取られた。そのまま床に押し倒される。

「やっ……」

クロードは、マノンの両手を片手で軽々と彼女の頭の上で押さえつけ、あいているほうの手を、マノンのふくよかな胸元へと伸ばした。マノンはすでに衣類をはだけられていたので、乳房は下着によって守られているのみだった。

「っ！」

下着の上からゆっくりと、そのやわらかさを味わうようにして胸を揉みしだかれて、マノンは大

いに戸惑った。彼の吐息が頬に触れるたび、どうしたらいいかわからずに身をすくませることしかできない。

「い、いや……っ」

身をよじると、クロードは全身を使ってマノンを押さえつけようとしてきた。

「やっ……」

このままではいけない。マノンは、ほとんど泣きそうな気持ちで大声を上げた。

「——やめてくださいっ！」

叫んだ瞬間、クロードがはっと息を呑む音が聞こえた。

それまでの張りつめた空気が、糸を切ったみたいに、ふつりとゆるむのを感じる。侯爵は驚いたように身を起こした。自分の腕の中であられもない姿になって泣きそうな顔をしているマノンを見て、目をしばたたかせる。——まるで自分が何をしていたのか、わからないとでもいうような表情だった。

マノンは急いでクロードの腕からすり抜け、胸元を押さえて部屋を飛び出した。

「待ってくれ……！」

クロードの声が追いかけてきたが、振り返らずに走った。

(な……何？ 今のは、何……?)

顔を真っ赤にさせながら、マノンは廊下を駆け抜ける。

(侯爵さまの瞳の雰囲気、急に変わったと思ったら、あ、あんなことに……)

額や頬に口づけられ、耳を食まれて、舐められた。あまつさえ胸を揉みだかれて、服を脱がされそうになって、そして……

マノンは生娘だ。恋をしたこともなければ、恋人がいたこともない。もともと社交的な性格ではなかったし、稼ぎのほとんどを祖父母に送っていたため、生きていくのに精一杯で、恋人をつくる余裕なんてなかった。

それでも世間の恋人たちが——婚前に肉体の関係を持つことは公には認められていないことだが——肌を重ねていることは知っていた。十八歳という年齢なりに、性に関する知識はあるつもりだ。

(拒んでは、いけなかったのに)

マノンは、ゆるゆると足を止めた。

(わたしはエレノア・ベケレルとして……花嫁としてここへ来たんだもの。わたしの役目は、侯爵さまのお子を孕むことよ。だから、拒んではいけないのに……)

そのまま両手で顔を覆った。

怖かったのだ。

だから、侯爵の手を拒んでしまった。

(だってあの時の侯爵さま……何だか様子がおかしかったんだもの)

突然苦しげに胸元を押さえたと思ったら、金色の瞳を獣のようにきらめかせ、そしてマノンにあら

んなことを……

「――あ」

自らの胸元が、侯爵に開かれたままであることに気がついた。ためらいながらもボタンをとめて、胸元のリボンを結ぶ。

ふいに顔を上げた時、はっとした。

目の前に、大きな扉があった。そのドアノブには、幾重にも鎖が巻かれ、いかつい錠が施されている。

「あ……」

そこは屋敷の北の最奥だった。廊下の突き当たりで、ひとつの扉が、ただ無言でたたずんでいる。(ここは……来てはいけないと言われていた部屋だわ)

一心不乱に走っていたためか、知らずそばまで来てしまったらしい。

嚴重に鍵のかけられた部屋。この中には何かがあるのだろう。

その時、冷たい風がどこからともなく吹き付けた。ぞわりと何かが肌を這い上がってくるような不快感に襲われ、マノンは慌てて踵を返し、その場を後にした。

3

夜になってから来客があった。

マノンはそれを、与えられた部屋の窓から確認した。

訪ねてきた男は、全部で三人。どの人物もきちんとした制服を身にまとっている。紺色の仕立てに、肩に白糸の房を垂らした、見覚えのある上着――リデアの町の自警団だ。ランタンを手に夜の庭に立っている。

(自警団の人たちが、こんな時間にどうして侯爵家に?)

三人の向かいに、頭ひとつ抜けて背の高い人物の姿がいた。クロードだ。

(侯爵さま……ずっと屋敷の中にいたのかしら?)

面々は何やら難しい表情で話し込んでいる。侯爵もまた、深刻な顔で彼らの言葉にうなずいていた。

しばらく彼らは同じ姿勢で話し込んでいたが、やがて自警団の男たちが侯爵に対して深く頭を下げ、去っていった。

(あんなに真剣な顔で、侯爵さまは自警団の人たちと何を話していたのかしら)

宵闇の中、彼らの進んでいった方角を見やる。あちらにはこの屋敷の出口があるのだと思うと、

マノンのはじわじわとした焦燥感に苛まれた。

——あそこから出れば。

あそこから出れば、この得体の知れない屋敷から逃れることができる。得体の知れない恐怖から、逃れることができる。純潔を失う心配をせずにすむ——

その時、マノンの背後でノックの音がした。

(えっ?)

コンコン。

コンコン。

マノンは驚き、ドアを見た。これまで、一度だって屋敷の中に人の気配を感じたことはなかった。それが不気味で、怖くて、不安だったはずなのに。それなのにどうして自分は今、ドアがノックされていることに、こんなにも怯えているのだろう。

その理由は、すぐに明らかになった。

ドアの隙間から黒い影が、液体のように室内に侵入してきたのだ。

影はもやもやとゆらめき、やがて床に這いつくばる人のかたちになった。ずり……ずり……と、下肢を失ったかのように腕だけ動かし、マノンに向かってくる。

「や……」

マノンは自らの膝ががくと笑っていることに気がついた。

怖い。

逃げなくてはならないと、わかっているのに、足が動かない。

影は音もなくマノンへと近づいてきて、そして彼女の腰にまとわりついた。

「……いやっ……!」

それはひんやりとして冷たかった。やがてマノンの目の前でみるみる縦に長く伸び、人のかたちをとる。

そして次の瞬間、影はマノンと同じ顔で笑った。

マノンは悲鳴を上げた。無我夢中で部屋を飛び出し、廊下を走る。どこに行くという考えはなかった。ただあの影から逃れたい一心だった。

「あっ!」

足がもつれて、その場に転んだ。すぐに立ち上がろうとしたものの、ずきんと鋭い痛みが足首に走る。躊躇したその一瞬に、マノンの顔をした影が彼女に覆いかぶさった。

「いや……っ!」

冷気のようなものに全身をつつまれる。

びりつと嫌な音がする。見ると、なぜかドレスの裾が破け始めていた。まるで見えない手に引く張られるみたいに、服が勝手にびりびりと引き裂かれていく。

「や、やめ……やめて……! いやっ!」

服の裾を手で押さえると、今度は胸元の布が破けていく。いつの間にか黒い影がマノンの周囲に

漂っていた。

(助けて——誰かつ……!)

「何をしている!」

聞いたこともないような低い怒声が響く。それに応じるようにして影が霧散した。クロードだった。

彼はマノンのそばに膝を折り、周囲の影が散っていくのを苦々しげに見届けると、服を引き裂かれて倒れていた彼女の体を抱き起こす。

「大丈夫?」

「こうしゃ……さ……」

マノンの呼吸は乱れていた。必死になって服を押さえていたため頬が上気し、エメラルドグリーン色の瞳には涙が溜まっている。

普段はひた隠しにしているふくよかな胸は、影のせいではほとんどあらわになっていた。マノンは半裸の状態でしゃくりあげる。

「ひ、う……」

影から逃れることのできた安堵で、思わずその場で泣き出してしまった。そんな彼女を、クロードは一瞬ためらうように見たが、次の瞬間、強い力で抱きすくめる。

「あ……」

クロードの腕の中は、広がった。広くて、そして温かった。

「……逃げてくれ、お嬢さん」

強い腕の力とは裏腹に、風にかき消えそうなかすれた声でクロードが言った。

「君を前にすると、私は人ではなくなってしまう。今すぐ逃げてくれ、いい子だから」

「侯爵さま……?」

クロードは半ば強引にマノンの体を自分から引きはがした。彼の顔を見た時、マノンはぞくりと身をすくませた。

金色の瞳孔が、まるで猫のように鋭く尖っている。

「こ——」

侯爵さま。そう呟こうとした彼女の言葉は、クロードの唇によってふさがれ、吸い込まれた。

「ん……っ」

口の中にねじ込まれた舌は、とろけるくらいに熱かった。突然のことに反応できずにいるマノンの舌を、クロードの舌が絡め取る。

「ん、んふ……」

マノンは驚き、戸惑い、反射的に自分を抱きしめていたクロードの体を押し返そうとした。ところが彼女の力よりもずつと強い力で抱きすくめられ、身動きが取れなくなる。その間も、クロードはマノンの唇を貪っていた。

唾液を絡め合うような口づけだった。クロードの舌がマノンの舌をつかまえて、執拗にねぶる。

まるで飴玉をとかすように。

「んんっ……う……んふう……」

やわらかな唇と、熱い舌に翻弄され、うまく息ができなかった。それでもクロードはマノンの唇を貪る。マノンの口の中を舐めまわし、口腔をくすぐった。唇が離れたわずかな隙に酸素を求めて喘いだ彼女の呼吸さえ奪うかのごとく、角度を変えて深く、激しい口づけが続く。

動揺のあまりうまく動けずにいたマノンだが、やがてはっとして、精いっぱい力でクロードの体を押しつけ、顔を背けた。

「やめっ……んむっ」

すぐに追いかけてきたクロードの舌に口をこじ開けられ、言葉を呑みこまれる。間近に迫ったクロードの瞳は、何かを堪えるようにかたく閉ざされていた。

「ん、んうっ……!」

どうして? と思った。

どうして侯爵さまは、そんなに苦しそうな顔をしているの?

なぜ、こんなにも激しい口づけをわたしにしているの?

まるでそれをなくしては生きていけないとさえ思わせるほど、熱烈で、切実な味わいの口づけだった。

彼はマノンの首すじに手を回すと自分のほうへと引き寄せ、もう片方の手で彼女の腰を抱き上げる。

「ふう……んぐ……んっ、——んっ!」

マノンは自分が対面する形のまま侯爵に抱き上げられ、運ばれていることに気がついた。

「えっ? えっ?」

唇を貪られ続けながらも、何度か抵抗を試みたマノンだったが、侯爵の腕がほどかれた時にはもうベッドの上に運ばれており、彼が自らの服に手をかけているところだった。

(どうして? どうなっているの?)

今、起きていることに思考が追いつかなかった。順繰りに情報を整理してみようと試みても、クロードの行為がそれを妨げる。

彼は自分の胸元のタイをほどきながら、焦るようにしてマノンへ口づけを繰り返す。

「ん……はっ、やめ……あ……」

彼の肩を押し返そうとしたマノンの手首を、クロードが掴んで押さえつける。足の間に体を割り入れられて、本当に身動きが取れなくなってしまった。生まれてはじめて密着した男の体はずっしりと重く、厚みがあつて、熱かった。彼の鼓動がどくん、どくと伝わってくる。

マノンの胸中を支配するのは恐怖だった。侯爵の子を孕まなくてはならないと理解はしていたものの、純潔を失うことの具体的な感覚については、実感が湧いていなかったのだ。

マノンは、がたがたと子ウサギのように震え出した。

「やめてください……!」

こわばる喉から、かすれた声を絞り出す。

「今すぐ、出ていきます。ご不快な思いをさせてしまったのならごめんなさい。だから、だからど

うか、お許しを——あっ……！」
 クロードの唇がマノンの耳元へと寄せられた。ぐちゅぐちゅと音をたてて、マノンの耳の中を舌でかき混ぜる。

彼は、耳朶を甘噛みし、きゅうつと口をすぼめてそれを吸い上げた。自らの蜜を注ぎ込むようにマノンの耳を唾液まみれにし、時に強く歯をたて、やりたい放題だ。

「……っ、う、ん、ふっ……」

耳の中をかき混ぜられる行為は、マノンにとつてはじめてだった。くすぐったさとむずがゆさがせめぎ合う。それが快樂なのかどうかは、よくわからなかった。体が勝手に逃れようとしたが、両手首を押さえつけられているため、身動きが取れない。首をすくめ、身をよじらせてクロードの舌から離れようとするものの、マノンの努力はほとんど功を奏していなかった。クロードの舌はやがて、するすると彼女の首筋へと下りてゆく。

「あっ」

鎖骨のくぼみを舐められて、未知の感覚にマノンは全身をこわばらせた。ぞくりと肌が粟立つ。それはくすぐったさとは違う、明確な愉悅だった。やわらかくて、けれど芯のしつかりとした熱い舌が、マノンの首筋を舐めまわしている。クロードは味わうようにマノンの首筋に何度も舌を往復させた。

マノンはそれに抗うために首を横に振っていやいやをする。反動でぼろりと涙がこぼれた。

「や、めてっ……！」

問答無用で与えられる刺激は、無垢なマノンにとつては、やはり怖いものだったのだ。

しかし侯爵は、そんな彼女の声を聞き入れてはくれなかった。逃げ出そうとする彼女の体を押し潰すようにして、厚い胸板がより強くのしかかってくる。とろけさせるほどしつこくマノンの首筋を舐めつくした侯爵は、唾液を滴らせながら唇を離し、再びマノンの唇にかぶりついた。

「んっ、あっ……んむっ」

突然のことで目を閉じることさえできなかった。マノンと侯爵は視線を絡めたままキスをした。金色の瞳孔を、鋭利なほどに尖らせたクロード。身がすくんだ。これは、侯爵ではない。知らない人の瞳だ。マノンの痛みや恐怖など、まるで配慮していない人の瞳だ。

「……ん、や……っ！」

マノンは顔をそむけて、彼の唇から逃れた。クロードの瞳は欲望しか宿していなかった。マノンを、人間としてではなく性の対象としてしか見ていないのだ。

(逃げない)

このままでは自分は、彼の供物にされてしまう。

震えながら身をくねらせたマノンに対して、侯爵はふいに、それまで拘束していた腕をほどいた。マノンは一瞬、虚をつかれて動きを止めた。ところがその刹那、彼は今度は両腕を使って、マノンの胸を下から持ち上げるようにして揉みしだき始めたのだ。服は破けていて、あつてないようなものだったので、肌に、直に彼の手の平の熱が伝わってくる。

「……………っ！」